

松明種類

〔義經記〕かゝみの宿にて吉次宿にがうとう入事

ゆりの太郎ふぢさはに申けるは、みやこに聞えたる吉次といふ金あき人、奥州へ下るとて、おほくのうり物をもち、こよひ長者のもとにやどりたり、いかゞすべきといひければ、中くつきや

うのあしがるども五六人、はらまききて、あぶらさしたるくる。まだいまつ五六たひに火をつけ、天にさしあげ、れば、ほかはくらけれども、内は日中のやうにこしらへ。略下

〔嬉遊笑覽〕火燭下義經記 二油さしたる車だいまつ、是は圓光大師傳 一夜討の圖に見えたり、束ね

たる松明を三ツ四ツほどをひとつにし、中を結て車のごとくにして、めぐりに火をつけたるを、家内に投入て明りとするなり、是に油をそゝぎたるべし、こは常に用べきものならず、

〔太平記 二十八〕三角入道謀叛事

城中ノ兵共、始ハ夜討ノ入ヨト心得テ、櫓々ニ兵共弦音シテ、抛續松屏ヨリ外へ投出、靜返テ見ケルガ、略下

〔謠曲〕烏帽子折

シテ 不思議やな、うちには吉次兄弟ならでは有まじきが、扱何者か有ッレ 投束ナゲ 莖イヅナの陰より見れば、年の程十二三計成稚き者、小太刀にて切て廻り候は、さながら蝶鳥の如く成よし申候、

松明用法

〔延喜武〕五齋宮月料小月物別減廿 松明三百把

〔延喜式〕六齋院凡齋王參下上兩社祭日、入夜山城國儲松明、掾若目一人祇承、其名簿前一日進官、

〔延喜式〕三十六主殿釋奠料春秋並同 松明七十把五十把燂五所料、廿把燒幣物料、略

加茂神祭料略 中 續松五十把

松尾祭料 續松卅把、炭一石、

〔世俗淺深秘抄上〕一不兼大將大臣騎馬之時、夜取松明者、先例様々也、或經大將入、雜色長取松明、或